

視覚障害者柔道における試合分析

－競技力向上を目的として－

下山 智大 (広島大学)

1. 目的

本研究では、試合分析は競技力の向上に効果的であると考え、視覚障害者柔道を対象に試合分析を行うことを目的とした。

2. 研究方法

1) 対象試合：2020年度講道館杯全日本体重別選手権大会 60・66 kg (37 試合)、2018・2019年度全日本視覚障害者柔道大会 60・66 kg (28 試合)。

2) 調査方法：記述的ゲームパフォーマンス分析を用いて、分析項目について数量的に処理した。

3) 分析方法：試合分析で得られたデータを、単純集計及びクロス集計をし、 χ^2 検定を行った結果、有意差が認められた項目のみ残差分析を行った。

3. 結果と考察

健常者柔道と視覚障害者柔道の比較において以下の有意な差が認められた。

1) 全施技についての比較

全施技において、健常者柔道と視覚障害者柔道を比較したところ、「足技」は健常者柔道において、「真捨身技」は視覚障害者柔道でそれぞれ有意に多かった (表 1)。

表 1 全施技における健常者柔道と視覚障害者柔道の比較

	健常者		視覚障害者		合計
	施技数(%)		施技数(%)		施技数(%)
手技	238(31.2)		100(31.6)		338(31.3)
真捨身技	69(9.0)	**	65(20.6)	**	134(12.4)
腰技	62(8.1)		22(7.0)		84(7.8)
足技	394(51.6)	**	129(40.8)	**	523(48.5)
合計	763(100)		316(100)		1079(100)

† p<.10 *p<.05 **p<.01

視覚障害者柔道では、投げられないように腰を引き合う場面が多くみられるため、その体勢から「真捨身技」に入りやすいと考えられる。さらに森本 (2007) が、視覚障害者の立位バランスが前後に大きく揺れることを明らかにしていることか

ら、後ろに転ぶようにして技に入る「真捨身技」が多くかけられたと推察できる。

2) 防御動作についての比較

防御動作における健常者柔道と視覚障害者柔道の比較では、「防御反応なし」に有意差が見られた (表 2)。

表 2 防御動作における健常者柔道と視覚障害者柔道の比較

	健常者		視覚障害者		合計
	施技数(%)		施技数(%)		施技数(%)
防御反応なし	427(56.0)		177(56.0)		604(56.0)
防御反応あり	268(35.1)		98(31.0)		366(33.9)
返し技	36(4.7)		15(4.7)		51(4.7)
防御に失敗	32(4.2)	**	26(8.2)	**	58(5.4)
合計	763(100)		316(100)		1079(100)

† p<.10 *p<.05 **p<.01

視覚は、情報収集において大きな役割を果たす (田中ら, 2008) ことや、視覚障害者は立位バランスが悪い (森本, 2007) ことが示唆されている。よって視覚障害者柔道は、視覚障害により相手の技に対しての情報が十分に得られず防御反応が遅れて取れなかった際に、立位バランスを保ちにくいいため、健常者柔道と比べ「防御に失敗」しやすいのではないかと考えられる。

4. 結論

本研究で、視覚障害者柔道は、健常者柔道と比べ「真捨身技」を多く使うことや、「防御に失敗」することが多いといった特徴が明らかになった。よって、視覚障害者柔道で使われている技を把握し、技に対する適切な防御動作を指導していくことが競技力向上のために必要であると考えられる。

〈参考文献〉

1) 田中靖人・野界武史・宗綱真治(2008)視覚と聴覚における同期時間と知覚の乖離, 電子情報通信学会技術研究報告, HIP,108(282), pp21-26